

文献紹介

平岡昭利編：『水車と風土』

古今書院 2001年9月

A5判 172頁 3,000円

かつて水車は、様々な産業で利用されてきた。比較的好く眼にしたのは揚水用や、精穀・製粉用の水車であろうが、他にも製材業、撚糸業、紡績業などで利用された水車は、低コストで省力化が可能なことから、蒸気力や電動力が導入されてからも中小規模の工場で利用され続け、まさに近代化の“原動力”として活躍してきた。

水車は、その仕様を降水量や河川流量、設置個所の広狭、傾斜など、地形・気候・風土などの諸条件にあわせて設計されるため、二つと同じ形のものではなく、どれもがみなそれぞれ違う顔を持っていた。それゆえ、自然と人間の関りを重視する地理学においてはたびたび研究対象として取りあげられてきたのだろう。そんな水車も、最近ではほとんど見かけることもなく、年々数が減ってきているが、本書は、現在稼働中の「生きている水車」をモノグラフしたものである。

I 「水車と風土」を語る

II 「水車と風土」

の二部構成でなり、Iでは、編者と池森寛氏の対談形式で、水車の歴史や用途・技術を中心に紹介し、IIでは、全国15地点の水車について豊富な図版を用いながら紹介している。さほど厚くない本であるにもかかわらず、表紙・口絵などを含めると、写真83点・図版75点を収め、かつて水車が音を立てて生きていた時代を記憶する世代には、その記憶を鮮明なものにし、評者のように生きている水車になじみの薄い世代には、水車の構造・情景を想起させてくれる役割を果たそう。以下、収録されている水車の用途、地域、執筆者を列挙すると、

- 1) 揚水、福岡県朝倉町、池森寛
- 2) 揚水、岡山県倉敷市、平岡昭利・松浦克朗
- 3) 精米、岡山県津山市、平岡昭利
- 4) 和紙製造、岡山県津山市・新見市、若村国夫
- 5) 製材、岡山県勝田町、若村国夫
- 6) エボナイト粉製造、大阪府島本町、平岡昭利
- 7) 陶土製造用トロンミル、岐阜県瑞浪市、伊

野重幸

- 8) 紡績、愛知県豊田市、天野武弘
 - 9) 製材、静岡県天竜市、天野武弘
 - 10) 脱穀用螺旋水車、富山県井波町、川上顕治郎
 - 11) 精白製粉、山梨上野原町、小坂克信
 - 12) 精白製粉、東京都三鷹市、小坂克信
 - 13) 精白製粉、群馬県大間々町、大島登志彦
 - 14) 線香製造、栃木県今市市、半田慶恭
 - 15) 鮭捕獲、北海道千歳市、後藤眞宏
- の15地点である。

全国の稼働水車に関する出版物は、黒岩俊郎・玉置正美・前田清志編(1980)：『日本の水車』、ダイヤモンド社、250p、国立科学技術博物館工学研究部編(1983)：『日本の稼働水車』、クオリア出版、71p、平出昭利編著(1992)：『九州水車風土記』、古今書院、198p、河野裕昭(1997)：『日本列島現役水車の旅』、小学館127p.など、数年おきに刊行されてきた。本書に収録される水車もこれらの中に一再ならず取りあげられてきたが、こうして再びお目に掛かることができると、つい「元気でやってるか」と、見に行こうという気になってしまうから不思議なものである。そういった希望を持たれる読者向けに、現地の地形図が添えられていることがありがたい。もっとも、水車がそれぞれの自然環境に即して設計される存在である以上、地形図は当然添えられべきなのであろう。

最後に、少々注文めいたことを言わせてもらえば、全国的な「生きている」水車のリストなり、分布図が欠落しているのは残念である。従来から地理学のみならず関心を寄せてきた結果、「生きている」水車に関する著作が、たびたび出されてきたのであろう。これらの書物との比較を通じて、時間軸に沿った水車の姿も浮かび上がってくると考えられるが、共有しうるデータベースの構築をはかっていけないだろうか。水車の現況については、地元自治体でも把握しきれていないのが実状である。今後とも一定の間隔で本書のような現況記録を目的とした出版物が出てくることを望みたい。

(天野宏司)